

暮らし彩る ひらせいホームセンター(新潟市西区) ■ 3 ■

野菜と苗で活路開く

大空の下、サツマイモを掘り当てた子どもの歓声が響いた。2009年秋、ひらせいホームセンター(HC)が新潟市西区で初めて開いた収穫祭。会場の畑は農家出身の現社長、清水泰明氏(71)の実家が耕作していた土地だ。

時代にともな
にいがた企業
Niigata ヒストリー

なった子どもたちのため、「少しでも有効活用したい」と企画。「ひらせい収穫祭」は後に長岡会場も加わり、夏はジャガイモ、秋はサツマイモを求めて親子1500人が参加する一大行事となった。

地元では後継者のいない農家が1軒、また1軒と離農し、耕作放棄地が目立つようにな

地元農家とファーム設立



出荷を待つ「ひらせいファーム」のナス苗＝新潟市西蒲区

っていた。「農地は財産」先祖からの預かりもの」と聞かされた育った泰明氏は、荒廃する土地を見て心が痛んだ。園芸用品や農業資材を商材とするHCの経営者としても、農業人口の減少は深刻な問題だった。ひらせいは07年、団塊世代の大量退職による園芸需要を見込み、地元農家に野菜苗の生産を委託。家庭菜園の関連商品の売り上げは好調に推移した。取引先の離農は、安定供給が断たれることを意味する。

農業の担い手不足と耕作放棄地の増加に歯止めをかける

角田山麓に連なるハウスは、3月下旬から5月中旬、ナスやトマトの苗で埋め尽くされる。17年に増設して計20棟となり、提携農家は40人に増えた。ここで県内と近隣のHC45店舗が販売する野菜のほぼ全てを生産する。

各店から毎日注文を受け、翌日の開店に間に合うよう配送。生産者と築いた独自の流通システムは「他社にできない強み」。ファーム社長で泰明氏の長男、泰成氏(45)は言い切る。生産者も「産地が地元だからできる。緑はどこよりも鮮やかで丈夫だ」と胸を張る。

夏はトウモロコシやスイカ、秋はネギ、冬はレタスと1年を通して野菜を生産し、自社の食品スーパーで販売。苗も野菜も市場を通さず低価格に抑え、食の安全を意識する消費者に地産地消をアピールしている。

若手就農者をサポート。農家が処分に悩むコメのみ殻を堆肥に活用し、「循環型農業」を打ち出した。

「農業を明るく、楽しく、もうかるものにする」。泰成氏は強調し、農業の活性化と販路拡大につながる「ツールの開拓に余念がない。都市部の女性層や子育て世代をターゲットに19年、家庭菜園の方法を紹介するサイト「Ikusei(イクセイ)」を立ち上げ、栽培キットの通販を開始。健康効果が話題の「もち麦やウイスキー原料となる大麦の栽培を始め、食品開発や醸造に携わる計画も進める。



「ひらせい収穫祭」で、土に触れる楽しさを実感する参加者。2018年、新潟市西区

農家と試行錯誤して生産効率を上げ、収益につなげてきた。ファームの売上高は約2億円となった。

「農業を明るく、楽しく、もうかるものにする」。泰成氏は強調し、農業の活性化と販路拡大につながる「ツールの開拓に余念がない。都市部の女性層や子育て世代をターゲットに19年、家庭菜園の方法を紹介するサイト「Ikusei(イクセイ)」を立ち上げ、栽培キットの通販を開始。健康効果が話題の「もち麦やウイスキー原料となる大麦の栽培を始め、食品開発や醸造に携わる計画も進める。